

11月第4週の礼拝説教

■日 時：2025年11月23日（日）10：30～11：30 降誕前第5主日礼拝
（収穫感謝日、謝恩日）

■説 教： 保科けい子牧師

■聖 書：新約：テモテへの手紙一 1章12～17節（新約 P384～385）

■説教題：「わたしが憐れみを受けたのは」

■讃美歌：53（神のみ言葉は この世界に）
464（ほめたたえよう、主のみめぐみ。）

本日は、教会暦（教会のカレンダー）では1年の最後の日曜日です。来週からクリスマス待ち望む待降節（アドベント、到来という意味）が始まると同時に、新しい1年が始まります。日本基督教団では、この教会暦における1年の最後の日曜日を、収穫感謝日および謝恩日と定めています。この日をそのように定めているのは、アメリカの Thanksgiving Day と関係があると言われていています。アメリカではピルグリム・ファーザーズ（Pilgrim Fathers、Pilgrimsは「巡礼始祖」という意味）と呼ばれることもあります。1620年にメイフラワー号でイギリスを旅立ったピューリタン（清教徒）たちのことを指しています。彼らがアメリカのマサチューセッツ州のプリマスに上陸した後、次の年の1621年に最初の収穫を祝って収穫感謝祭が行われました。それを記念して、現在、アメリカでは11月の第4木曜日に収穫感謝祭が祝われています。日本では主としてプロテスタント教会ですが、それを踏襲しています。コロナ禍以前の教会では、教会学校の生徒たちが果物や野菜を持ち寄りお祝いをしていたこともありました。キリスト教主義の幼稚園や保育園などは、子どもたちが持ち寄った野菜は礼拝におささげものとしてささげ、その後豚汁にしてみんなで食べるとか、あるいは果物を近くのお世話になっている公共の施設に届けるというような行事をしていました。昨年ぐらいから、そういう行事が少し復活したと聞いています。

さて、本日の聖書箇所の手紙への手紙1章12節にまいりましょう。元の言葉を見ますと、12節は「感謝」という言葉から始まっています。そして、「わたしを強くしてくださるわたしたちの主キリスト・イエスに」とつながっています。私たちが今、礼拝で読んでいる新共同訳では、「わたしを強くしてくださった、わたしたちの主キリスト・イエスに感謝しています。」と最後に来ていますが、元の言葉は感謝という言葉から始まるので、収穫感謝日である今日、この箇所は選ばれているのではないかと思います。なんとなく、忘れられない聖書の箇所と言えるかもしれません。その理由は後ほどお話しいたします。このテモテへの手紙は、使徒パウロが伝道旅行によく連れて歩いた「テモテとシラス」というように、二人一組で語られることも多い若いテモテにあてて書かれています。1章の3節を見ますと、「マケドニア州に出発するときに頼んでおいたように、あなたはエフェソにとどまって」と書かれていますから、使徒パウロからエフェソの教会を託されたのです。エフェソは、聖書の後ろにある地図でご覧になるとわかりますが、アジア州にあります。そこで宣教するときに、「異なる教えを説いたり、4作り話や切りのない系図に心を奪われたりしないようにと。」「ある人びとに命じなさい」という指示を、使徒パウロから受けたのです。しかし、エフェソの教会の困難な状況を前にして、自分は福音の奉仕者としてはふさわしくないのではないか、若輩である自分が語った言葉を本当に聞いてくれる人がいるのだろうかなどと思い悩んでいる様子が、この手紙のあちらこちらに見受けられます。おそらく、パウロにいろいろ悩みを打ち明けていたのかもしれませんが。そのようなテモテに対して、パウロはこの福音がいかに素晴らしいものか、いかに力強いものかを、彼自身の経験を証しすることによって語っているのが、本日の箇所の12節から17節になります。使徒

パウロは、迫害の中でも大胆に福音を語り続け、また、様々な困難を乗り越えてきました。けれども、それは、決して人間パウロが強かったからではないのです。一人の人間パウロは、弱くて恐れおののく者だったのです。しかし、そこに彼を強くして下さる主キリスト・イエスが働いてくださいました。その力を注いで下さった主キリスト・イエスに、パウロはまず感謝をささげているのです。パウロは12節の「**わたしを強くして下さった、わたしたちの主キリスト・イエスに感謝しています。**」という言葉によって、テモテもまた自分の弱さではなく、テモテを強くして下さっている、そういうキリストの力に目を注ぐようにと切に願っているのだと思います。

13 節にまいります。13 節では、使徒パウロが主イエスに出会う前の様子が語られています。「以前、わたしは神を冒瀆する者、迫害する者、暴力を振るう者でした。しかし、信じていないとき知らずに行ったことなので、憐れみを受けました。」使徒言行録の9章には、その時のことが記されています。パウロが主イエス・キリストを否定して主の弟子たちを迫害し、彼らが礼拝をしている集会場に攻め入って、彼らを捕らえ死に至らせるようなことをもしていたということがわかります。その時代はサウロと言いましたが、彼はエルサレムやイスラエル内だけでは物足りずにダマスコの方まで行って、キリストを信じる者たちを捕らえてエルサレムまで連行しようと考えていたことがわかります。その道を急いでいたまさにその時、キリストは一方的に彼をキリストに忠実な者と認めて語りかけて下さった、という回心の場面が鮮やかに描かれています。ですから、そのキリストに対して使徒パウロは感謝で溢れていたのです。14 節の「そして、わたしたちの主の恵みが、キリスト・イエスによる信仰と愛と共に、あふれるほど与えられました。」という言葉がそれをよく表しています。最近では、ほとんど私は見かけなくなりましたが、私が青年時代の頃ですと、路傍伝道をしている方がおられました。大勢の人が集まるようなところに立って、聖書の御言葉を語り自分自身の信仰の証しを語ったりしていたのです。その光景で、私の脳裏に今も鮮やかに残っている記憶は、語っている方が涙を流しながら、罪人であるご自身に与えられた溢れるほどの恵みを訴えられていた様子です。この世を生きる私たちは、様々な苦しみや悲しみを抱えています。しかし、人生の最も深い苦しみ、悲しみというのは、私たちに罪があることだというふうに語っておられる方がいます。私も本当にそうだと思います。それは、私たちがいろいろな悪いことをしているというよりも、この私に命を与え人生を導いておられる神の愛を知らずに生きていることであると言っても良いのではないかと思います。私たちは礼拝に来ているから、神の愛を知っている、主イエスの救いを知っている、そういうふうに思われるかもしれませんが。けれども、私たちと主なる神との良い関係が本当に結ばれているだろうか、いうことを自分自身に問う時に、現実には私と神との間に、私の方から信頼を寄せていることがあまりにも少ないということに気づかされます。神が私を導いてくださろうとして差し出してくださっている手を振り払っている私がいる、そういうところに突き当たってしまいます。そのことを「罪人」という言葉で言い表すことができるのです。この世を生きる中で体験する苦しみや悲しみの根本的な原因は本当はそこにある、神との確かな関係を私たちの中で築いていない、そこに問題があるということはこの箇所を読むときに知らされます。

15 節には「『キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた』という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します」とあります。括弧に入っている「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた」という言葉は、クリスマスの意味を一言で表していると考えられます。しかし、私たちはこのみ言葉を本当に真実として、そのまま受け入れることがなかなか出来ません。では、この言葉を真実としてそのまま受け入れ、クリスマスの本当の喜びに満たされていくためには何が必要なのでしょうか。15 節後半にその答

えが示されています。「わたしは、その罪人の中で最たる者です」とあります。「罪人の中の最たる者」というところは、口語訳聖書や新しい聖書協会共同訳では「罪人の頭」と訳されています。口語訳に馴染んでいる方は、ここは「罪人の頭」だったはずだと思われるかもしれませんが、「最たる者」とか「頭」と訳されている言葉は、元々は「第一の者」という意味です。キリストが救うために世に来てくださった罪人の中の「第一の者」が自分なのだ、とパウロはここで語っていると思います。そのようなパウロの自己認識を見つめながら、もう一度13節に語られている使徒パウロの以前の姿を読みましょう。「以前、わたしは神を冒瀆する者、迫害する者、暴力を振るうものでした」それらの行為は、現実的には教会の信者たちに悪いことをしていたということなのですが、本当は神を冒瀆していたという行為だったのです。以前の使徒パウロは、ファリサイ派の中のハリサイ派、ユダヤ人の中のユダヤ人、それから、イスラエル民族の中の特別な民族に属する者だ、と自己認識をしていました。しかし、それは神を正しく理解しておらず、つまり神との関係を正しく構築しようということにはなっていなかったと、ある時に気づかされたということだと思います。けれども、そのようなパウロに対して、一人のキリスト・イエスによって、罪人を救おうとしておられる神の御心は働きました。その御心が働いた時に、使徒パウロは「私は罪人の中の第一の者だ」というふうに自己認識が変わっていったのだと思います。しかし、ここで注意したいのは、パウロが他の人と比べて自分が一番だと言っているわけではありません。むしろ、他の人と比べようがないほど、本当に罪人の中の「第一の者」だと考えているのだと思います。

続く16節に、「しかし、わたしが憐れみを受けたのは、キリスト・イエスがまずそのわたしに限りない忍耐をお示しになり、わたしがこの方を信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本となるためでした」と記されています。罪人の中の第一の者であった自分が神の憐れみを受けて救われたということがここに語られています。そしてその救いはキリスト・イエスがまずそのような私に限りない忍耐をお示しになったことによって与えられたのです。「まずそのわたしに」という言葉に注目したいと思います。「まず」という言葉、それは元の言葉を読みますと「第一に」という言葉であり、15節の「最たる者」と同じ言葉です。つまり、パウロは15節では自分が罪人の中の第一の者だと言っており、16節ではキリストの限りない忍耐による救いが、まず第一に自分に与えられたと言っているのです。この2つのことは呼応していると思います。罪人の中の第一の者である自分は、キリスト・イエスの限りない忍耐による救いを第一に与えられた者だと述べているのです。私たちは、自分自身を考えると、人と比べてどうなのかということをよく思います。けれどもその時に、このパウロのように、罪人の中の第一の者である自分は、キリストの限りない忍耐による救いを第一に与えられた者だと考えることができているのでしょうか。私自身は本当にそういう意味では、いつも自分と他の人とを比べています。神の前に出て一生懸命に祈ろうとする時にも、私の祈りと他の人の祈りとをいつの間にか比べている、そういう自分があることに気づかされます。使徒パウロは、キリストの「限りない忍耐」による救いを第一に与えられた者と自分自身を捉え直しています。私たちもまた、そのようにして自分自身をもう一度捉え直してみたいと思います。そして、キリストによる限りない忍耐を受けたその目的がどういうことだったのかということも考えてみたいと思います。16節では「わたしがこの方を信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本となるためでした。」と語られています。では、私たちは本当に他の人の手本になるようなそういう生き方をしているだろうか、と問われます。これは世の中の生き方とは違います。本当に神の前で、他の人のお手本となるようなそういう生き方をしているだろうかと問われているのです。救われるどころか滅ぼされるべきであるこの自分に、キリストが限りない忍耐を示してくださった、その救いが他の誰でもないこの自分に与えられているということ、

私たちは本当に深く見つめることができているでしょうか。教会の暦では、一年の締めくくりになる今日、私たちもまた、自分こそが第一に憐れみを受けた者であるからこそ、主イエス・キリストの到来を誰よりも心の底から待ち望む者へと変えられて、待降節へと進んでいきたいと思えます。そして、待降節には主イエス・キリストを心から待ち望むものとして歩めるようにさせていただきたいと思えます。

お祈りをします。主なる神様、今日は教会の暦では一年の最後の締めくくりの日になっています。収穫感謝の日にもなっています。そのような中で、私たちはこの一年間を振り返り、私自身は本当に神様の前にあって、罪人の頭であるという自覚ができているだろうかと問われます。しかし、あなたは御子イエス・キリストを十字架におかけになることによって、私たち一人ひとりに、あなたを豊かに待ち望み、あなたの御子を待ち望む思いを深くしてくださいました。どうぞその思いを持って今週一週間を過ごすことができますように導いてください。この祈りを主イエス・キリストの御名によっておささげいたします。マーメン。